四川省（漢旺・綿陽）訪問記

2011.1.18

香港　花木

1．地震復興

四川省成都市の北約 200 キロにある震源地に近い一帯を訪れた。古い町並みはそのまま廃棄され、無人化しており、その近郊に新しい村ができていた。中国の震災復興では日本と異なり複雑な権利処理をすることなく、一律に被災者に住宅をあてがう方式をとっているようである。新しく作られた村は清潔で美しかったが、屋台等は規制されているのかあまり見かけず、こうした生活の場は近郊の道路上に移っているようであった。

↑　無人のまま放置された街

↑　放置されたビル

↑　繁華街も放棄されている

↑　新しく整備された被災者住宅　かつての町から 2 キロほど離れている。

↑　商業活動の中心は近くの道路上に移っていた。

２．綿陽

震災被災地に近い四川省第二の都市、綿陽市を訪れた。同市は「中国のロス・アラモス」と呼ばれるほどで核兵器関連の研究施設が集積しているが、震災の影響は実質的にはほとんどなかったようである。また、同市は、家庭用テレビメーカー「長虹」の本社が所在することでも知られる。

綿陽を有名にしたのは何と言っても昨年 10 月の反日デモであろう。西安や成都、郑州といった大都市での反日デモの発生に続き、翌日発生した綿陽のデモでは、自動車の破壊や商店の破壊等がなされたと報じられた。日本とほとんどつながりのない街で大規模な反日デモ（暴動）が発生したことは当時多くの日本人を驚かせた。このことについて何人かに聞いてみたが、反日デモの発生自体を知らなかったり、知っていたとしても「日常生活の不満について、反日を口実にして憂さ晴らしをしただけだ。」との回答が多かった。実際、綿陽市は生活水準も高く、先日訪問した宝鶏と比べても緑化が進み都市としては成熟している地域のように感じられた。

↑　綿陽市中心部。国有企業が多く、平均所得が高い都市として知られており、台湾系等海外資本の百貨店も進出している。

↑　デモの際襲撃された日系商品専売店も普段と変わらず営業していた。

余談であるが四川省では震災復興もあり公共工事が多く、以前は広東省への出稼ぎといえば人口の多い四川省出身者が最大だったが、今やその地位を湖南省に譲っている。実際四川省を歩いてみても、省都成都市の街角は中心部に限れば上海に見劣りしない発展ぶりであり、生活コストの安さ（住宅価格が平米 9 千元程度と上海の半額以下）を考えればここからあえて沿海部に働きに行く積極的な理由はないように見受けられた。

また、四川省一般に消費性向が高いことでも有名（宵越しの金を持たない、千元稼げば二千元使う等）であるという。上記住宅価格も数年前には 3 千元程度だったというからわずか数年で住宅価格が 3 倍に値上がりしているわけで、消費を動因づける資産効果には大きいものがあるだろう。成都市は日系商業企業の進出で有名であるが、成都市に限らず周辺都市の購買力もかなり高そうな印象を受けた。

（以上）